

★ 研究所 だより ★

「いま『協同』を拓く2000全国集会」の準備が佳境を迎えています。私自身が、この準備の過程でいろんなことを考えさせられているのですが、「労協新聞」10月25日号に書いた原稿に加筆して、研究所たよりにさせていただきます。

これまでの集会で得たもの

7回の協同集会を通じてなしえたことは大きく3つあります。ひとつは、1987年にはじまった当時は、ほとんど「労働者協同組合」を知る人がいなかった時代ですが、初めて、働く者の協同組合が日本の中で生まれていること内外に示した集会でした。その成果のひとつが92年のICA（国際協同組合同盟）の加盟に結びついています。二点目は、NPOが話題になるずっと前から、非営利・協同の働き方が各地に広がり、地域の中で力強く活動を行っている事実を発掘してきた集会だったということです。濃淡はありますがそのネットワークを作ってきました。三点目は、これが一番重要だと思うのですが、協同組合は単に流通事業を担うだけでなく、働くことを通して地域の多様な必要に応えることができる存在であることを、諸外国の経験も含めて示してきたことだと思っています。

今回の集会の意義

そして、これまでの協同集会がどちらかといえば学び合い交流しあうことが中心であったのですが、それと比較して今回の集会は次のような3つの特徴をもっています。ひとつは、労協が高齢者協同組合の組織化と福祉活動を通じて

地域と出会い、協同組合と協同労働に確信をもって迎える集会だということです。労協クラブの広がりとも合わさって、労協運動の実績と可能性が積極的にアピールされる場となるでしょう。二つ目は、市民事業（コミュニティビジネス）を地域にもっと広めるために「協同労働の協同組合法」という立法政策を掲げていることです。このような政策をはじめて私たちが掲げてのぞむ集会です。25日の午前中には「法制のための市民会議」も設立され、各党の政策担当の関係者も同時に参加されます。三つめは、集会全体が、「協同が息づく地域社会」の建設のための政策を探る集会になるということです。明日から役立つ実践的政策をこの集会で学ぶことになると思います。そのために、政府、自治体関係者の方々の集会参加にも取り組んでいます。

みんなで創る集会に

大事なことは、集会の意義を自分の仕事、自分の関心、そして事業所やブロックの仕事、関心にひきつけて、それぞれがどう関わるかを主体的に考えて行動することだと思います。そうすれば、取組んだ人の数だけ知恵があつまり、良い集会が実現できると思います。狭い実行委員会や事務局の知恵の範囲で終わらせないようにしたいと思います。今回の集会は、表題もこれまでの「協同を問う」から「協同を拓く」に改めました。21世紀を展望し、本当に『協同』が息づく地域をつくろうという心意気をもって、協同集会を成功させましょう。

坂林 哲雄